

彩の国シェイクスピア・シリーズ第16弾

『コリオレイナス』

異文化の架け橋として

1～2月の彩の国さいたま芸術劇場での初演の後、4月にはロンドン、バービカン・シアターでの公演を控えている『コリオレイナス』。1983年、初めて海外公演して以来、蜷川幸雄演出の作品は度々、海を越えてきたが、外国でも理解され、評価されるのは何故か。

蜷川へのインタビューから、異なる文化に対する洞察と日本人としての深い思いが見えて来た。

文・木俣 冬(ライター)



蜷川が目指すのは、徹底した“アジアのアイデンティティー”

以前、蜷川幸雄の世界公演地図をつくったことがある。1983年の『王女メディア』イタリア、ギリシャ公演から、毎年一度、どこかしら海外公演を行っている蜷川の足跡を図で確認したかったから。すると、アメリカ、ヨーロッパ、アジア……と世界地図の殆どが埋め尽くされた。けれど蜷川は言う。世界進出双六をやっているわけではない。

2006年の蜷川は『タイタス・アンドロニカス』を、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが主催するシェイクスピアの祭典〈コンプリート・ワークス〉で上演した。「蜷川がいなければハムレットのないシェイクスピアみたいなものだ」とイギリス人に言われるほど蜷川シェイクスピアは信頼が厚い。蜷川のギリシャ悲劇もギリシャ本国で本質を捉えていると評価が高い。普遍的なテーマの下には世界に境界はないと蜷川の演劇は示してくれる。独特のジャポニズム表現が受けるからといって、それに頼っては真の異文化理解にはならない。『タイタス〜』ではあるシーンに歌舞伎調の動きを用いようとしながら、試行錯誤の結果蜷川はあえて排除した。

蜷川が目指すのは、媚びたジャポニズムではなく徹底した“アジアのアイデンティティー”。ゴールド・シアターの40人強の高齢者たちに、『タンゴ・冬の終わりに』の88人の幻の観客を演じる若者に、ひとりひとりの個人史を表現させることが、“アジアのアイデンティティー”につながっていく。最近しきりにこの言葉を用いる蜷川に“アジアのアイデンティティー”と海外公演の関係について聞いてみた。

「自分の作品を海外でやる時は、民族的な衣裳や、ある種の日本人的なアジア的な感性を表面に出したほうが受けやすい。その時に、もっとユニバーサルにするのか、アジアを強烈に押し出しながら、彼らの期待するアジア人の本質を見せていくのか。その選択に自分自身のアイデンティティーがあると思うんです。異文化に身を置くことによって、余計に、自分の立っている位置を、自分の根底を問わざるをえないところに追い込まれるし、何を選択するかを

明瞭にせざるをえないんです。海外で公演するということは、日本人としてアジアの人間として、それを乗り越えた普遍性を獲得できるのかという問題を常に抱えながらやっていくことです。今はそれをどんどん鮮明にしていこうかなと思っています」

『コリオレイナス』を引っさげイギリスで真剣勝負

2007年の蜷川は、4月に『コリオレイナス』をイギリスで上演する。エリート対群集を描いた戯曲に、アジア特有の群集パワーを注ぎ込み、イギリスに挑む。

「西欧的な洗練や観念に収斂されていくものじゃないものをやりたいですね。論理だけでは済まない、もっと様々なものを含んで混沌とした世界を提示することがアジア的な世界観なのだと思います。それには出演者も大勢確保します。海外公演で大人数だと経済的にも負担がかかるけど、それは譲れません(笑)」

件のイギリス公演は、ロンドン、バービカン・シアター主催する演劇フェスティバル〈BITE - バービカン・インターナショナル・シアター・イベント〉10周年を記念した祭典に参加するものだ。蜷川はバービカンで、真田広之が道化役で参加した他はイギリス人のみのキャストで行った『リア王』(99年)、藤原竜也がデビューした伝説の公演『身毒丸』(97年)、『近代能楽集』(01年)、『ハムレット』(04年)の上演などを行い、信頼を深めてきた。

「バービカンは、客席に通路がなく、稽古中、客席から舞台まで行くのが大変なんです。でも、気に入った公演には、スタッフが客席から舞台へ橋をつくってくれるんですよ」(蜷川)

まさに異文化の架け橋！
「バービカンの食堂で、ジュディ・デンチやピーター・ホールと交流して、彼らが芝居の出来が気に入らなくて三日間お客さんを帰らせ続けた…なんて生々しい話を聞くと刺激になります。僕もそんなことをやってみたいよ(笑)」

蜷川は自身と日本(ひいてはアジア)を背負って、今年もまた世界に立ち向かっていく。

Story

貴族であるケイアス・マーシアス(後のコリオレイナス/唐沢寿明)は、尊大なためローマ市民たちに敬遠されている。だが、ローマと対決するタラス・オーフィディアス(勝村政信)率いるヴォルサイ人に勝利し、その首都コロライを陥落させた功績により、コリオレイナスという名が与えられ、執政官に推される。正式に就任するには市民の許諾が必要のため、ししぶコリオレイナスは慣例どおり粗末な服を着て市民の前に出る。しかし、護民官のブルータスとシニシアスにけしかけられた市民により、弾劾されてしまう。誇り高いコリオレイナスは、一度は母親のヴォラムニア(白石加代子)の説得に応じるものの、市民に謝罪せず追放の身に。自分を追放したローマに復讐するために、コリオレイナスはかつての敵オーフィディアスと手を組むが、再びヴォラムニアの必死の説得で、ローマと和解することを決意する。その彼を待っていたのは……。

彩の国シェイクスピア・シリーズ第16弾

『コリオレイナス』

【日時】1月23日(火)～2月8日(木)

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演出】蜷川幸雄

【作】W.シェイクスピア

【翻訳】松岡和子

【出演】唐沢寿明、白石加代子、勝村政信

香寿たつき、吉田鋼太郎、逢川哲朗ほか

【チケット(税込)】好評発売中

S席9,000円 A席7,000円

B席5,000円 学生席2,000円

※各公演前に「さいたまアーツ・シアター ライブ」を行います。詳しい内容は、P.9をご参照ください。

彩の国さいたま芸術劇場から海外に渡った蜷川演出作品



1997年公演より。
1999年公演より。
藤原竜也(右)と白石加代子。



1999/2000年公演より。
イギリス各地公演「リア王」。



2001年公演より。
2001年公演より。能楽集「空塔婆小町」より。
榎時彦(左)と横田栄司。



2002年公演より。
2002年公演より。
唐沢寿明(左)と大智しのぶ。



2003年公演より。
2003年公演より。
内野聖陽(左)と田中裕子。



2006年公演より。イギリス各地公演「タイタス・アンドロニカス」。